『開幃試問四十二章』から見た宋初天台の問題意識

林 鳴 宇

一、『開幃試問四十二章』の成立背景

宋の大中祥符三年（一〇一〇）、知礼が住持した知恩院は、朝廷の勅命を受けて寺名を延慶院に改め、正式に「十方住持」制の寺院となった。これは、七年にも亘る山家山外の『金光明經玄義』広本略本論争が終息した三年後のできごとであった。「十方住持」制とは、寺院のために有能な僧を自由に登用することができ、各地の修行僧も自由に寺院に掛搭できる制度である。政治的な支援があり、半分官寺でもあるため、一般的な師弟相承の寺院に比べると、寺院の規模や寺衆の数を短期間に拡大することができる。「十方住持」制が開始された当初の延慶院の僧衆はわずか五十人であったものが、知礼の入滅した天聖六年（一〇二八）に至ると、知礼の教えを受けた門下生と名乗る者だけで少なくとも五百人以上に及び、寺院の檀信徒は五千人にも達したのである（『教行録』巻六「使帖延慶寺」、巻七「尊者実録」より）。

このように、「十方住持」制のおかげで、延慶院はわずかな数年で、天台教学の一大拠点となった。その間、知礼は、民衆に対しては、放生会や念仏施戒会などを開き、天子や國家に対しては、祝聖や懺法を行い、仏教の教えをできるだけ社会に還元しようとしていた。しかし、彼の最大の目的は天台教学の再興にあった。七年間の『金光明經玄義』の論争において、知礼は、錢唐の源清、洪敏、慶昭、智円らと単身で論戦を繰り広げ、最終的には論争を終息させたものの、完全に勝利したとは言えず、知礼説に同調する者は少なかった。知礼にすれば、錢唐の諸師への対抗策として、自説の影響力の拡大、優秀な人材の確保、天台の伝統教学の復興のために、十方住持制の寺院とするのが最良の方法であったのかもしれない。こうして、自仁、則全、覺琮、崇矩、慧才、仁岳、本如、尚賢、梵臻など天台教学を勉強しようとする学僧たちが延慶院に次々と集められ、知礼説を学びながら、智顗が伝えてきた様々な天台教学の教理問題の議論が始まった。『教行

録』によれば、知礼は日々天台典籍の講義をし、それが終わると、聴講した僧衆がどの程度理解したかを確認するために、質疑応答を行い、さらには宿題をも課した。これらの質疑応答と宿題そして回答の内容について、『教行録』は、『絳幘問答三十章』、『教門雜問答七章』、『四種四諦問答』、『開幘試問四十二章』の四種を収録している。

知礼が延慶院を「十方住持」制にすると、僧衆は増加し、それに伴い天台教学の参究も活発化した。『開幘試問四十二章』も、このような背景の中で現れたものである。また、延慶院では、僧衆の去就が自由なため、知礼教学を受け継いだ者が明州以外の地にも及んでゆくことができ、知礼教学が宋代天台の主流となった一因ともなったのである。

二、『開幘試問四十二章』の内容と問題意識

『開幘試問四十二章』は、天聖二年（一〇二四）の五月に知礼が六十五歳のときに作ったものである。延慶院での「十方住持」制実施後十数年の間、知礼は、朝廷より大師号を賜り、京師の宰相や地方の官僚に厚く信頼され、教団の影響力も日々大きくなっていった。教理の研究面では、これまで空白とされた天台「五小部」の注釈（『金光明經文句記』を除く）をほとんど完成させ、新しい知的財産をも教団に残した。また、弟子の仁岳の協力で、銭唐諸師の論調を次々と論破し、天台

『開幘試問四十二章』から見た宋初天台の問題意識（林）

教学の權威として君臨しようとした。さらに、禪宗にまで論争を広め、天台教学の優位性をあまねく主張したのである。

このような背景の中で作られた『開幘試問四十二章』は、知礼により選別された「一家の教観の津要」としての基礎問題集である。全篇は四十二の質問から構成され、回答は含まれていないものの、これらの質問の傾向を分析すると、知礼教学の基幹たる部分の一端を窺い知ることができる。

しかし、当文献は短編であり、知礼やその門下は具体的な回答を示していないため、江戸時代の光謙の『開幘試問四十二章答』以外、従来、ほとんど注目されてこなかった。以下、光謙の『開幘試問四十二章答』を参考し、四十二の質問の要旨を示す。

第一問、『法華玄義』卷二上にある「相待妙」を立てる理由は何か。

第二問、『法華玄義』卷二上にある「絶待妙」はどんな修行法によるのか。

第三問、『経体』をめぐる『法華玄義』卷一上に引用された金剛蔵菩薩の偈文について、『釈籤』の説明はどのように理解するのか。

第四問、『法華玄義』の五重玄義における「体」と「宗」の前後関係は何か。

第五問、『法華玄義』卷九下「論用」に説かれた経の「力

用」と修行者の知力の関係は何か。

第六問、『法華玄義』の五重玄義における「名」、「体」、「宗」、「用」の四は既に五時教判を論じており、五番目の「教相」を立てる意味は何か。

第七問、『摩訶止観』や『法華玄義』に説いた四種四諦の中にある「生滅四諦」は、藏教の教えであり、事相に属するが、なぜ実理に帰することができるのか。

第八問、『釈籤』巻十二では、四種四諦の「無生四諦」が常住を知らず、通教の教えに過ぎずと言った。理由は何か。

第九問、別教の四諦が「無量」になる理由は何か。

第十問、円教の四諦が「無作」になる理由は何か。

第十一問、『法華玄義』巻二下に説かれた「七種二諦」の第一「実有を俗と為し、実有の滅するを真と為す」の「実有の滅すること」をどのように理解するのか。

第十二問、『法華玄義』巻一上「明宗」の示した藏通二教の結果はなぜ異なるのか。

第十三問、『法華玄義』、『法華文句』に藏教にも大中小の三乗があるとするが、それでも藏教を小乗とする理由は何か。

第十四問、『金剛錚』では、『涅槃經』巻三十三に記した十種の外道による虚空説を以て、仏性に対する誤解を示したが、この十説のほか、仏性を説明できる虚空が存在するか。

第十五問、『止観義例』では、不思議の妙境について四つの

説明をする。その第一は、無情の境に仏乗を樹立することである。これは「心具三千」か、「色具三千」か。

第十六問、智顗は、普賢道場で宿世の因縁を見て、法華三昧を証得した。しかし『輔行』では、これが南岳慧思による伝授であるというのはなぜなのか。

第十七問、『輔行』では藏教の三観義を示したが、通教の三観義は何か。

第十八問、円教も善惡諸法を具えている。これは、「性惡」説と言えるのか。

第十九問、『法華經』方便品では「衆生をして仏の知見を開かしめ」と説き、観心してこれを修行する意義は何か。

第二十問、『法華玄義』巻二下の「会異」では、五重玄義で四悉檀を会釈した。この理由は何か。

第二十一問、『文句記』巻二中では、『法華文句』の「十法界十如」を「百界千如」、「百如千界」と釈するが、この理由は何か。

第二十二問、円教の真俗二諦は教・行・証の三つに従い、随情智を示した。その経緯は如何なるものか。

第二十三問、『四念處』巻四に一念心に無明法性十法界を具えると言う。仏界の修性は如何なるものか。

第二十四問、『維摩文疏』に前三教の我聞を権にし、円教の聞こそ実であると説いた。この理由は何か。

第二十五問、『涅槃經』を以て四教を説明するに、教、理、智、斷、行、位、因、果の八つの面から区別できるが、それぞれの常と別はどのように区別するのか。

第二十六問、法華涅槃時とは言え、四教における両者の異同はどこにあるのか。

第二十七問、湛然が説く「法華超八」は、化儀・化法の八教の外に存在するのか。

第二十八問、他經と『法華』はともに円教を説くが、『釈籤』巻一ではなぜ他經を「次第三諦」、『法華』を「円融三諦」にするのか。

第二十九問、『法華』によって聞思修の三慧を修證するに、具体の区別や方法は如何なるものか。

第三十問、天台典籍のどの部分の説明を勉学修行すれば、信解を生ずるのか。

第三十一問、『法華』の本地による授記は、他經に比べてはるかに多いが、久遠による證入であることをどのように理解するのか。

第三十二問、天台では、伊字三点を大乘の不思議と喩えているが、上方の一点はどのような意味を有するのか。

第三十三問、『涅槃玄義』では五重玄義を以て、正性、因性、因因性、果性、果果性の五仏性に対応して説明した。その意義は何か。

第三十四問、『天台智者大師禪門口訣』に「実心繫実境」などの四句の偈が見られるが、これが止觀の意と一致するか。

第三十五問、『摩訶止觀』巻五に説いた「善巧安心」の方法とは何か。

第三十六問、天台教学を学び、三慧の聞慧を修するに、最も基本的な方法とは何か。

第三十七問、衆生と仏は同じく三千を具えるが、その異同はどこにあるか。

第三十八問、『金剛錚』に、「有性」を大教、「無情」を小宗と示したが、その大小区別の理由はどこにあるのか。

第三十九問、『妙宗鈔』に、『觀經』を解釈する五重玄義の内容は『觀經』が説いた觀法と同様である。その理由は何か。

第四十問、常寂光土には、金宝と泥沙の相がある。『仁王經』はなぜ「ただ仏一人のみ浄土に居る」と言うのか。

第四十一問、円教の修行者は、はじめから果地の三徳を以て觀心の対象とする。その理由とは何か。

第四十二問、『止觀』巻五に止と觀の關係を「昏に即してしかも朗らかにし、散に即してしかも寂ならしむべし」とし、『輔行』はさらにこれを「二觀」、「三止」と説明した。その意味をどのように理解するのか。

以上の四十二の質問を整理し、『開緯試問四十二章』の問題意識を要約すると以下の通りである。

①『五小部』の内容がほとんどなく、『三大部』を中心とする智顗教学に基づいている姿勢が明白である。一乃至十三、十六、十九乃至二十二、二十五、二十六、二十八、二十九、三十一、三十二、三十四、三十五、四十二の二十七項の質問は、『三大部』および湛然の注釈によるものである。また智顗の『四念處』（二十三問）、『維摩文疏』（二十四問）、『禪門口訣』（三十四問）、『観心論』（三十六問）、灌頂の『涅槃玄義』（三十三問）をも検討の対象とした。そして四十二項の質問は、すべて天台典籍から回答を見つけ出すことができる。

②湛然説に対する判断を施している。湛然が著した『三大部』の個別注釈の判断について、宋初の山家山外は大きく分かれた。智顗教学に基づき如何に湛然説を判断するかが、知礼を含む当時の延慶院の大きな課題であったと思われる。三、十四乃至十七、二十一、二十七、二十八、三十八、四十二の十項の質問がこれに属する。

③知礼がかつて自著で論議した課題を収録する。十五問の「色具三千、心具三千」が『十義書』の第三義に、十八問の「性悪」説や二十一問の「百界千如、千界百如」が『観音玄義記』などに、三十二問の「伊字三点」は『妙宗鈔』や『観音玄義記』に、三十七問の「生仏三千」は『指要鈔』に、三十九から四十一問の教判や仏土の内容も『妙宗鈔』に取り上げている。

④延慶院ですでに頻繁に論議されていた課題を収録する。一、二問の「二妙」は『教門雜問答七章』の第二問に見られ、七問から十問までの「四種四諦」に関する内容も『四種四諦問答』や『絳幘問答三十章』の二十六問に見られる。二十四問の「権実」は『絳幘問答三十章』の十八問と類似する。これらの課題が再三に提起されたことから、宋初天台が重要と考える教学思想の一斑を知ることができる。

⑤教学思想に限らず、勉学の姿勢を示している。三十問は、天台典籍のどの箇所にも最も重要な天台の教えや修行法があるのか、との質問である。もっとも、天台の教観を一文一句に集約することは容易でない。『十義書』の第五義では、知礼が湛然の『輔行』の意に基づき、「一、二句の観心を用いて修行することを得ざれ」と語り、観心釈を断章取義的に解釈した慶昭らを「専ら一句にして即ち足ると執する者」と激しく非難した。三十問も、このような背景のもとで、天台の修行を速成しようとする者に対し、知礼が忠告を込めて出したものと考えるのが妥当である。

〈キーワード〉『四明尊者教行録』、『開幢試問四十二章答』、知礼、

延慶院、十方住持

（駒澤大学非常勤講師・仏教学博士）

Lotus Sutra, and the Observation of the Mind. The purpose of this concept is to reveal the absolute theory of complete fusion of the truth and perfect equality of the Law based on the idea of non-substantiality. According to this concept, the pre-*Lotus Sutra* teachings are those of discrimination. The purpose of the Theoretical Teaching of the *Lotus Sutra* is to reveal theoretical absolute equality. The purpose of the Essential Teaching of the *Lotus Sutra* is to teach true absolute equality. The purpose of the teaching in the *Lotus Sutra*'s Observation of the Mind is to reveal that the self-manifestation of absolute equality transcends the comparison of different natures.

5. Transformation of Understanding of “Zhangshouzhi shi zhengti zhi yong 長壽祇是証體之用”

FUSE Gikō

The expression “Zhangshouzhi shi zhengti zhi yong 長壽祇是証體之用” can be found in volume one of Chanjan's *Commentary on the Fahua xuanyi*. It indicates that the eternal life span of the original Buddha, revealed in chapter 16 of the *Lotus Sutra*, “The Life Span of the Tathāgata was a benefit of having of touched perfect awakening. Chanjan interpreted Perfect Enlightenment as “zhufa shixiang 諸法実相 (The True State of All Elements)” preached in Shakumon Sections of the *Lotus Sutra*.

In Japanese Medieval Tendai, the strange tendency to interpret Enlightenment as Innate Buddha-Nature (Original Enlightenment) appeared.

On the other hand, according to Nichiren, Enlightenment was understood as the Fundamental Truths of the Hommon Sections of the *Lotus Sutra*. However, in the history of subsequent Nichiren religious group, the term was interpreted variously.

6. The Trend of Tiantai Buddhism in the Early Song as Seen in the Kaiwei shiwen sishierzhang

LIN Ming-yu

‘Kaiwei shiwen sishierzhang’ 開嶂試問四十二章 in the *Siming zunzhe jiao xing lu* (四明尊者教行錄 Record of the Venerable Siming's Teachings and Practices) is com-

posed of 42 questions on Tiantai Doctrine, and is a test which Siming Zhili 四明知礼 (960-1028) assigned to his disciples.

In this paper I tried to analyze the contents of this text in compassion with 'Kaii shimon shijūnisyōtō' 開幃試問四十二章答 written by Kōken 光謙 (1652-1739). I will examine this text to understand the fundamental thought of Tiantai Buddhism in the Early Song. Thus the mutual relations of this text and 'Jiangwei wenda sanshizhang' 絳幃問答三十章, 'Jiaomen zawenda qizhang' 教門雜問答七章, 'Sizhong sidi wenda' 四種四諦問答 are confirmed too.

7. Fangyan Heshang: the Enlightenment Instructor of Jingxi Zhanran

CHI Li-mei

According to an inscription entitled "Xiao-shibei (The small stone monument)," it is said that in the sixteenth year of the Kaiyuan era, Jingxi Zhanran came to Zhedong (the east part of Zhejiang) area to look for a Buddhist master. Three years later, before he eventually began to apprentice himself to Zuoxi Xuanlang, Zhanran met his enlightenment instructor from whom he had received instruction on Tiantai doctrines as well as some texts of Zhiguan (The cessation-and-contemplation).

Due to the limited information on Fangyan Heshang, scholars only assumed that Fangyan was likely to be a disciple of Xuanlang. Not until 1999 did scholars, such as Xu Wenming of China and Kōchō AKITA of Japan, begin to realize that Fangyan could be Fangyan Xuance, one of the disciples of Huineng — the sixth patriarch of the Southern Chan sect. Based on the assumption mentioned by the two scholars, this paper attempts first to outline the figure of Xuance, and then to review the possibility of identifying Fangyan Heshang with Xuance.

8. Doctrinal Interpretation of Tiantai Through Zhiyi's Attitude

KASHIWAGURA Akihiro

A grave concern of mine is what to consider as the unique characteristic of Tiantai Doctrine. The Doctrine does not imply the teaching of Tiantai alone. To understand the true concept of Tiantai Doctrine, one will have to